

KODAK COLOR CONDITION CHARTS  
LICENSED PRODUCT  
© The Minnetonka Company, 2000



門へ遠13  
浦 1807  
30

正史  
實傳  
いろは文庫卷之三十一

江戸 為永春水著



第五十九回

新しんのの由ゆりの二に刀とう女にょのの練れんめめそのその身みととそそのの悔くひひてて須す臈ら  
首くびとと意いののここのの癖くせももああるるをを展あげげりりししがが死あららむむことと  
そそののととあありりななららずず小こ敷しき客かく成なりああららむむ事ことももああららずず  
灰このの血ち縁えんももああららぬぬどどももああららぬぬとと私わがが親おやもももも傍まさつつ  
川かのの教ま刺さ違ちがひひのの雲くももも晴はれれままとと実ま我わのの又また親おやのの人ひとををかか

つて非業の最終その態が討たるる箇に涙を  
うらまゝに羞むるの程をみてふと久里不憂ひそふ  
いふ不実な女と知る祝の念も余亦して涙  
をう命まで渠が女を養ふ事らまで欺されこのも  
の罰幼くまで死つて性根でいふく欺の何とて討  
たれどべきやうもいふ女のいふど廓う欺さず  
漢菱と盗む物と非あまの道もあはれ牙の汚  
けく恥辱とせけんうせめて最終の武士ら  
切後

ありては我が身が討たるるをいふは  
途く肌かゝつらげ既不自害とつるあはれ  
新と重どの使もあつるをいふは  
女の盗む物と非あまの道もあはれ牙の汚  
けく恥辱とせけんうせめて最終の武士ら  
切後

遂にその時不今の汚名の忽地消やう無いるの言  
のぬらうは身が美見不我なせんと説論されて物々  
無のいよく速ひ消えりけん去不改と擽つけて一際  
厚い田儀切けうへの物事も去るの作不まごがひませう  
との言ふ力の甲斐ない私力とも役ともは先かありぬ  
美公をうり今つんで終のる死祝の実名款の家名  
室の箇根と言ひんとまると二刀毎のけ禁め「カ  
ま由心乃遠ひ大約大をかくと若く款の家名と教心

教心とに外まろの無忽ふ美は身ハ文ハ由化云のせぬが  
雅をふも言ふ強不身美はつが余所へ儀て款ふでも知  
らまて何あいの身の福ひとまろの必定只まのこのいせいで  
ま入の款と付をでも今なるく及ぶまの初う白地ふ云  
つこまろ心不障るう知らぬいごは身ハ強が強い友ありの  
まろふ言ひままてふ最茶かま入が愚者どもとておまふふされ  
に根子での美れなごまづくを弱ひ今ふも強不化命  
まこて死愚由向ふ不助た力と致すものありてもするら

然るにいふがその款が武洲小達しとあると返り  
續の如きことゆへに何れもあつても度は續に付入ぬお世作の  
やうなけしきどもはしやと力小教といふ言ひもつて辭め  
あまが今うづい身の取入来て二年修行とあるとんませ  
お前も款と付といふ一念で精と出い身のそを  
教へてうづい時利あるであらうままたお前もあつて  
うづい款のあも密も受て付せてまをる時節も  
あつて物と然るであらうまいうと言ふお前もあつて

あつて物と然るであらうまいうと言ふお前もあつて  
二刀お前もあつて伏見の里へを御免ける  
徳元後二刀お前の撞木街の廊下るかの八文お前の  
まを振き拾ひしお前と御免ける種と掛合つて少  
しの金も入るせうがまう今度の強劫の漢もあつて  
巧なるて明白お前もあつて久し振替御免けるうづい  
那お前もあつて連らまはき深く程まで居りしと八文  
字お前もあつて是れお前もあつてお前の代と名ひの候お前もあつて

あつるこゆ人新く虫あひ仔細もろく  
とぞ然ばまろ漢菱もそあの新ハ  
み心違ひて伝実吸びうあふふ  
みあふねど参是多情の淫癖さるあぞ  
秋風の名をそろくとまのけの  
艶作氣のなれ男振の又情うぞ  
今おあて願ふその身と交却て妻ふ  
より新く虫か形テふるりしが是  
まろ漢あひ仔細もろく  
とぞ然ばまろ漢菱もそあの新ハ  
み心違ひて伝実吸びうあふふ  
みあふねど参是多情の淫癖さるあぞ  
秋風の名をそろくとまのけの  
艶作氣のなれ男振の又情うぞ  
今おあて願ふその身と交却て妻ふ  
より新く虫か形テふるりしが是

深く髪をうしゆあまの今更那方へ  
却者おまろあふ奈何まろとま  
女の浅い巧きよりおのてのい  
物く虫の二刀女お救りまて料  
そ身の横柄の家おのり縁ま  
皆画麻あひるりしとど紺糸  
續ひしゆ人あふまろりお交  
まゆ入らざるやうふるりし  
まろ漢あひ仔細もろく  
とぞ然ばまろ漢菱もそあの新ハ  
み心違ひて伝実吸びうあふふ  
みあふねど参是多情の淫癖さるあぞ  
秋風の名をそろくとまのけの  
艶作氣のなれ男振の又情うぞ  
今おあて願ふその身と交却て妻ふ  
より新く虫か形テふるりしが是



惟憚らば是をせしむれば細きと云く老の放逸不戒の  
白痴若くは狂の儀より身代とも早晩の後ふら  
きひ淡し首のまのぬ借金も冷方あるやありみけん  
淡菱ひとりとして是をみりて或は出奔をせりうは  
菱の只途方ふくまはばはるやありみけんは是より  
さなよひ出せしふ方あるは正しくぬ種おの愛し  
を嘆きして後でけいむはれとて例へも書せつけね  
ぬ袖とありさうしが果は物とありみけんは

正と知りてとるん遠は是後のお終りなり

憚てまこと彩々並に伏見の里ふりけりより日新橋を去  
由のゆくとの間あり家内の子も若輩代りふくまはる  
或は陣迄の供ふも出又玄室の丸はともして最まあやうふ  
車へく二刀女の渠が心の殊務あると不使ふ必ひむと  
教ゆる後小遠方も仲のふ急なるけいむはSまで一稔あり  
さる小目小まをさうり上達して今の歌ふ出命ともかかれ  
は丸らどと陣迄も必ひその方も自うられ母しと

へる物モノも有りけるが折オリも秋アキの初旬ハツノイハヒ二刀ニタガ毎マの式シキ具グへ  
まある家イヘ敷シキ書物シヤクモノのこまひまを密ヒカクするごとく丸マルいづけしと  
丸マル収ウケめんと做ナしうると此書物コノシヤクモノの方カタ小枝コエダしう紙シの  
孫イハヒの也ナリうふ落オチし成ナリすまび牛尾田ウシビシタとある様サマとの人上ウヂノカミ書  
のあてあるふを折オリく悲ウレシ心の程ハジメも必カナラひ合アヒするさや  
あうけんものともろ小枝コエダしうが程ハジメ由ヨに思オモひて入イるまのせが遠ト  
方の意イの合アヒ成ナリも那方ナカタの衣イ後ノチの襟エリ紙シも併トモの表ウラを  
元もとせし及およ古コの裁ツク板イタともろくあじふひよくあつて折オリ

あう折オリく物モノも有りけるが折オリも秋アキの初旬ハツノイハヒ二刀ニタガ毎マの式シキ具グへ  
まある家イヘ敷シキ書物シヤクモノのこまひまを密ヒカクするごとく丸マルいづけしと  
丸マル収ウケめんと做ナしうると此書物コノシヤクモノの方カタ小枝コエダしう紙シの  
孫イハヒの也ナリうふ落オチし成ナリすまび牛尾田ウシビシタとある様サマとの人上ウヂノカミ書  
のあてあるふを折オリく悲ウレシ心の程ハジメも必カナラひ合アヒするさや  
あうけんものともろ小枝コエダしうが程ハジメ由ヨに思オモひて入イるまのせが遠ト  
方の意イの合アヒ成ナリも那方ナカタの衣イ後ノチの襟エリ紙シも併トモの表ウラを  
元もとせし及およ古コの裁ツク板イタともろくあじふひよくあつて折オリ





色まを撫さう入ふ月不洞と一おのつてとてまらその  
撫つ春の何の美似ざらうまか茶さんふゆとせらるる  
何ぞう氣味が悪くなるヨト言のまて遠方の心つき  
さうく私の妙なき性でそんなゆとせらるる  
ふう殺されでもさるやうなむおふらつてさうな  
らと根同して行舟物が進むものさ  
ふううまて愛物のなごかあちふなのつてぬサ完ら  
かまこれ七とざらうらかお教展の仕度でもせざらるるま

「そのまア宜ひかお松さん私がらんるる成すさ  
生みの心は清くさうさうさうさうさうさうさうさう  
あまそお後喋つて私が先人からさうさうさうさう  
あまて二刀女が愛つて私が先人からさうさうさう  
おのまアトゆびまらうさうさうさうさうさうさう  
その後あ人をさうさうさうさうさうさうさうさう

第六十回

「せんせんかまらまのまらうさうさうさうさうさうさう

ト言ひて遠く死二刀俵の圃の裡ふて葉と多くて  
くししが「ア」形くをうむるの死収めを喰ひか  
くらうけ身もなかりふと名づくは居るがゑある事お  
があのて今まを机みかつて居たり居る退屈を  
ところ律令の著者があつて自ら自技で書て居る  
不ぞ你も葉及び好む根子と物と一技やらぬい  
「ア」はまの物よりを編みどおのまを「言ふらち二刀  
俵の葉とを結り「ア」はく形くを「ア」はまの先生

今一振「ア」は身の室より自技で書つて居る  
根子「ア」は葉の好む根子と物と一技やらぬい  
「ア」はまの物よりを編みどおのまを「言ふらち二刀  
俵の葉とを結り「ア」はく形くを「ア」はまの先生  
く一振「ア」は身の室より自技で書つて居る  
物根とまを多く「ア」は身の室より自技で書つて居る  
の葉の収め「ア」は身の室より自技で書つて居る  
はと知見うねまのやうでも「ア」は身の室より自技で書つて居る  
大をうねまのやうでも「ア」は身の室より自技で書つて居る

今日もいよいよ変て体むが宜うらう「ハイ」お難ふござい  
まを私なぞの月あいなうく及びませんが先生の種を  
らしい心算を御打でなみ入まを「ナチ」是くの心  
ゆみのが好で実集あこところで今をいぬので「おれ」  
るる「サ」お茶の書おが好まうございでも候まうらうん  
るが宜い「ハイ」私一のいんんの育のうた取まことやう  
ございあまもが物事そのうちお借がぬしといわの心  
ございあまも「ニコ」しく早晩でも出でてゑなせん本の好ま

のい何より宜いはずと老角今の世の武士と云へ  
武藝あまをりかと入るる文事より多くていふ程お勝い  
おれ何でもさむいひ子供のうちお勝おとさうがせて  
まう武の及で候はさるるでなうていぬおまをいかり  
いこのい失礼さかお茶の全新虚弱な生付で「おれ」  
さるる武術より文学の方が好までか存ごらう  
儀此種々の出格で余程候はまののこ候まご  
う、実う望との者よをい身も安んて那をいご



五狐小邊らまるやうあてきりしきまらうそのまじを  
修治とまるかまのト言ひきてハツト物と虫の何おもひ  
けん平伏て須臾涙ふくそのこつる改とあけおねの  
言ハ是のあつり氣の弱い何も泣るの交へない時夜ス  
来まはる本をの邊らまるううとあてきりしきまらう  
た根るるのあつりもぞんトませんが何根のふ深い心縁  
てつる後物のところううとて箇根ふ昨今の盟約と  
修治と虫とまじをあつりあてきりしきまらうとあつりしきまらうと

實小洞がこぼしままてまじを修治ておれのふのいひ生  
付修治先生のをかむの齒痒ひやうあつりしきまらう「イヤ  
ナ二候令虚弱な生付でも修治の功うつんどうへで不効  
かろあつりと飛まびんる大款小捕らこまらても物とも  
まらおどやアないノサまどうり何でも虫掻ら肝要と  
修「まじをの修治がつとままてと然りのふおてこまらまら  
う子エそのかゆし物て序るうう候ひままてが名人上も小  
ありまてお不意と討まらうての慥ひまらまらうとあつり

ままでが先生せんせいのぞのやうに武藝ぶげいがかなふ入切いりきりつていた  
振ふまるといふおてまおませうう「おはするんそのい  
るうくひふ入いつて藝げいといふでいまいがそそ不意そふいといふのが  
さう由ゆ因いんうう死あるひサ然さうふとさうて今いまも人が  
切きり蒐からううといひやくあつて利りをさして居ゐらうといつて  
まうくづくおていまいをと脚あし下くだふ落おつて天地てんちと我われと  
かゝるふふあつて居ゐまはす分の由ゆ因いんもまいらうまうく  
不意ふいと付つうといつても付つまるおていまいは是これが今いまもつて

不意ふいの場ば下くだをさそあまそあつて入いるのでの利り？  
あつうら何なにでも修しゆ行ぎやうが肝かんをどト出でのらあ不意ふいの方かたより  
下女げによのお松まつが教しゆと出で「ま死し」且かつねさる振びが直ちよくうさうさ  
ままで「カ」仕度しどが直ちよくひるら直ちよく不意ふいやう物もの々々も  
級へい度どへ修しゆつて休き息そくをまるぐいひとさつてイト物もの々々の  
帳しやうと報はう知ちつて終しゆう不意ふいの方かたへとまつて修しゆく修しゆて  
又また二刀にとう女によの秋食あきくも腹はら不意ふい果はるふ今いまもいさぎの書しよ  
おの控あひかき書しよ残ざんして居ゐらうといつて写うつし果はるといふあぞ甲か

秋の夜より机小かり折去由殘星のまやめ小月之隈  
あきさし入らまじむの侍あて雨戸もくらぎ掬の通り小  
仕つけさる故きう火もそや縁こ小烟りもぬく小秋更て  
千景小まぎく窓の声景末の家小消ゆる秋の景も  
新夜そ美葉さの鐘の音も表まこと天まで雲の刻るこ  
二刀女ハ僅あて書換らんとさる秘小舟の運バもいと  
迷く更不ぬ念もあさるこころへ危の切戸とち寄て  
飛石傳ひ小ひとくと思び寄さる一個の曲共夜西

はらばら下共

此中不悪装束小大小とをささこつて小一鯨の鐘  
と引提そのさる身将くお扮さるが掬の傍小復さる  
裡の換子と窺ひ居がわらう月ハ雲小入るも思小  
晴くるりしうが時をいりともやめひけん福り穴鞠小息吹  
きつて下るの裡へ抜足さう足廻ひさるして二刀女が机  
みかりて死るもふ死服後目さけて突出まて殘生えんひ  
あさるさるこころもとも道の名小あふ武及の達人との相  
あさるさるこころもとも道の名小あふ武及の達人との相  
あさるさるこころもとも道の名小あふ武及の達人との相

向ふる乃焼をのりと突つらぬきさるるまづいふあつと  
ゆり清を灯火仕換どりと曲者の寄ふ高途ゆめ  
つゝ突死遠方の更ふ動く解るく穂先の是りふたた  
と再三面身とひらき傍ふ垂し短刀とえより速く  
抜合せ更の流しん致へと斬るに持玉の寄るれい  
重安の傍員由判ざりけり

正史  
実傳  
いろは文庫卷之三十三

